

# 日本キリスト教会大阪北教会

正午礼拝説教

2004年07月14日

## 『婚宴のたとえ』

聖書 マタイによる福音書 22章 1～14節 讃美歌 226 230

説教 森田幸男牧師

今日の箇所でもイエス様のたとえ話が続いています。今日のところは2節にありますように、天の国のたとえであります。今日の箇所では二つ或いは三つのたとえが一つのものとして記されております。1節の、「イエスは、また、たとえを用いて語られた」とある、「たとえ」は複数になっています。ですから、婚宴というテーマは一つですが、仔細に見ていくと二つ或いは三つのたとえが一つになっていることがわかります。いずれにしましても今日のたとえにおいては、この婚宴の主権者である王は、神様のたとえであります。そして王子はイエス様のたとえであります。そしてたとえが使われるのは、本当に伝えたいことがよく伝わるようにという配慮をもってなされるのが普通ですね。たとえを用いて難しくするというは、ないわけでありませぬ。けれども譬えは本当に言いたいことのたとえですから、本当のことが分らないで、譬えだけが印象に残るといふことはよくあることであります。でもイエス様がたとえを出される時には、そのたとえ話を聞く人が皆、それを聞いたなら何のことだか分るのでなければ、たとえを用いる意味はないと思うのです。たとえを出しても、たとえそのものが分らなくて、たとえの説明をしないといけないうことなら、最初からたとえを出さない方がいいということですね。

ですから、ここでたとえに用いられている婚宴のことは、これを聞く人々が皆、よく分っている話だということですね。ですからイエス様も聞いておられたし、そしてイエス様が話している相手、今日の場合は一般の聴衆ではないのです。一般の聴衆もまわりをいたでしようけれども、ここではイスラエルの指導者たち、祭司長や長老たちや律法学者たちが、今日のたとえの聞き手なのです。

さて、今日のたとえですが、ある王が、王子の婚宴に客を招待していたのです。そして当日、婚宴の用意が整いました。招待客の人数は書いていませんが王子の婚宴ですから相当な数のはずです。仮に百人としても、百人の人に、さすがに王子の婚宴だと、客が納得もし喜んでもらおうと思えば、料理一つにしても大変な準備がいると思うのですね。熱いものは熱いうちに、冷たいものは冷たいうちに食べてもらうために、百人の人にタイミングよく料理を出すのは本当に大変ですね。わが教会では毎週、礼拝後に愛餐会をしますが、30～40人であっても、お味噌汁ひとつにしても、タイミングよく出すのは大変ですね。これが百人或いは数百人ということになると大変だということは想像できますね。

ところが勿論こういう大掛かりな婚宴ですから、突然開くということはありません。勿論前もって日にちは伝えてある。そして用意周到に料理の準備が出来たところで、「さあ、おいでください」と使いが知らせる。ところが土壇場になって皆、断ったということですね。

これは普通考えられないことです。それは一般には無くはないのです。私も二月ほど前、同じ日に二つの約束をしてしまって、前日になって一つを断ったのです。いまだに思い出すと心がうずきます。今日の場合は王子の婚宴です。招かれる人たちは相応の人たちです。各界の代表です。それがその日になって断るといことは考えられないことですね。ところが招かれていた人たちが皆が断ったということなんです。それでも王は忍耐強いとかまた別の使いを出して、「用意ができたからどうぞ来てください」と繰り返し言っているわけです。こういうことも異例なんです。しかし「人々はそれを無視し、一人は畑に、一人は商売に出かけ、また、他の人々は王の家来たちを捕まえて乱暴し、殺してしまった。」これもちょっと普通考え難いことではないでしょうか。「そこで、王は怒り、軍隊を送って、この人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った」と、聖書は書いているのです。これはどういうことかと思うようなことが書かれています。先ほども申しましたように、譬えは皆が周知の事でないとい用いる意味がありません。ですからこの話をされれば皆がピンとくるような実例がその頃あったのではないのでしょうか。イエス様もそれを聞いていたし、祭司長や律法学者たちもそれを聞いていて、その話を出すと皆が分かるというような・・・

そこで、ここからは想像ですが、この王は、かつては非常に権威があつて堂々としていたけれども、今やその王としての権威がなくなつてしまい、皆がついていけなくなつた。裸の王様のようなものになつていた。まだ自分に力があるように思つて人を招待していた。ところが皆は、“今更あんな王のところに行つても何の得もない”というのが本当の腹だつたのではないのでしょうか。だからその時になつて断つたのです。この王が、今支配しているというのであれば、何をおいても行つたと思うのです。ところがこの王は斜陽で実質的な権威はなくなつていて、人心はもう離れているのに、なお自分に力があるように思つていたけれども、皆、断つて、使いまで殺したというのは、もうこの王を恐れていないということです。でも王ですから、なお近辺にいる軍隊を送つてその人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払つた。ついこの間までイラクを支配していた大統領の姿が思い浮かびます。

そこでこの王は面子にかけてこの婚宴の席を何としてでもいっぱいにして、一般の人々を誰も彼も皆集めて来させた。そして王が客を見ようと入つて来ると、礼服を着ないで平服で来ていた者がいた。そこで王は、「友よ、どうして礼服を着ないでここに入つて来たのか」と言つた。これもちょっと予備知識がいると思うのです。皆は急に招かれたわけですね。ですから普通なら用意がないから平服で行くしかありません。当時のしきたりでは、こういう王が催すような婚礼では、王の方で礼服まで用意したそうです。ですから皆は着の身着のままで行つて宴会場の外の控え室で、用意された礼服に着替へて出ると、こういうしきたりだつたそうです。ところが一人礼服を着ていない者がいたので、「どうしたか」と王様は聞いたということです。「するとこの者が黙つているので、王は側近の者たちに言つた。『この男の手足を縛つて、外の暗闇にほうり出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』」実はこの王は面子丸つぶれなんですね。本来招いたそれぞれ各界の代表は一人も来ないわけです。けれども何とか席は埋めたけれども怒りで頭に血が上つていものですから、礼服を着ないで宴会の席に出ている者を見ると腹がたつたのでしょう。側近の者にこのように命じたということです。実際にこういう事があつたらうかと思つますが、

あったのでしょうか。そうでないと、これをたとえにする理由がないと思うのです。

それで、1 節を見ますと「イエスは、また、たとえを用いて語られた」とこのようになっているのですが、実は、ここでひと言訳されていない言葉があります。冒頭に、「アポクリテイス」という言葉が入っているのです。これは新共同訳でも前の口語訳でも訳されていません。この「アポクリテイス」というのは、普通は「答える」という意味ですが、本来の意味は「裁く」という意味の言葉です。その前に「アポ」という、意味を強める接頭語が付いています。このような徹底的な裁きを意味する言葉が1 節冒頭に入っているのですが、翻訳ではそれがすっぽり抜けているのです。けれどもそれが入って訳された方が、後のたとえの凄さとぴったりするのです。どうしたわけか大方の訳は出ていません。

岩波書店の佐藤研訳ではこうなっています。「するとイエスは答えて、再びたとえで彼らに語って言われた。」「答えて」と言うのですから、だれかが質問したということになるのですけれど、そうすると前を見ないといけなわけです。21 章の最後の 45 節、「祭司長たちやファリサイ派の人々はこのたとえを聞いて、イエスが自分たちのことを言っておられると気づき、イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。群衆はイエスを預言者だと思っていたからである」とあります。その態度に「答えて」ということです。しかし、この答えは徹底的な裁きを含む答えなのです。わたしはそこで私訳を試みました。「イエスは非難して、再び彼らにたとえで語って言われた」と。これでもまだ訳としては弱いくらいです。本当は、「イエスは憤りを覚えて、再びたとえで彼らに語って言われた」としたいくらいです。

というのは、これはエルサレムの神殿の境内での話です。これはどこから話が起きているかといえば、21 章 12 節にイエス様のいわゆる「宮清め」の話が出ています。神殿でイエス様は、両替人とか献げ物の鳩を売る者の腰掛を倒されて、「この神殿はすべての人の祈りの家なのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしまっている」と、激しく怒られたのです。これは当局者にとっては放置できない乱暴狼藉であり、それこそ神冒瀆です。そこで祭司長や律法学者たちが出て来て、「何をするのか」ということで、本当はイエスを即刻捕らえ、処罰、抹殺したい。けれども彼らの周辺を群衆が取り囲んで見ていたのです。群衆はイエス様を預言者だと思っていますから、手をかけるわけにいかない、という経過の中で今日の個所に来るわけであります。つまり、彼らは神様を畏れているのではなくて、群衆を恐れているのです。

そしてたとえの中では、招かれた人たちは畑に行きます。商売に行きます。ルカによる福音書の並行記事では、「結婚したから行けません」という、そんな断り理由まで出てきます(ルカ 14:20)。そうしますと、宮清めにおけるイエス様の怒りと、今日のたとえの中での王の怒りというのは、その熱っぽさでは同じレベルにあります。ですからこのたとえだけでは中々分かり難いのですけれども、今日のたとえにおいてもイエス様の宮清めの時の怒りは持続しているのです。いよいよ憤りを覚えて、非難して裁いておられるわけです。しかもその裁きは徹底的であります。拒否した者たちには軍隊を送って滅ぼし、町を焼き払うという、徹底した裁きをしているのであります。ここはたとえとして読まないといけなんでしょうけれども、その譬えに込められている怒りは、神様の怒りなのです。

こういう流れで読んでまいりますと、このたとえは二つ三つが一つになっているわけですが、言わんとするところは、王様の喜ばしい婚宴への招き、天の国への招きというのは、そういうものなのだ。これを普通は断る人はいないのだけれども、それを全く無視する。そういう形でそれを拒否するということは普通ないのだけれども、イエス様は、「あなたがたが神様に対してしているのはそういうことなのだ」ということを、このたとえでおっしゃりたいわけです。そして神の招きを無視する者は、ただでは済まない、自らに裁きを招くのだということをおられるのだと思います。

そして、このたとえを離れて最後のところには、「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない」と主イエスは言われます。本当に「天の国」「神の国」とは何で、私たちはいったいどういう祝福へと招かれているのかということを受け取り損ねて、その思いは、畑に行くとか、商売するとかは別に悪いことではないけれども、物事には優先順位というものがあるのです。何かが重なった時、どちらを選択するのか。それを間違えると、身を滅ぼすことになるというのは実際にもよくあることです。

そういうことで、私たちも始めに戻れば、このたとえの相手である祭司長や律法学者やファリサイ人や長老たち、彼らは神を畏れない。そして神の招きの声を聞かない。それ故に神の国の豊かな祝福にあずかり得ていないし、また人々を誤って導いて地獄の子にしているというふうに、神様には見え、イエス様の目には映ったということだと思います。いずれにしても、宮清めも含めて今日の箇所は、神様の厳粛な、徹底した裁きを示しています。私たちも今日のたとえに触れると、これを見過ごすことはもうできないのです。

そういう意味で、今度は律法学者や祭司長やファリサイ人や長老たちではなくて、今このような形で一緒に聖書のたとえ話を読む私たちの問題であります。私たちに求められているのは、本当の悔い改めではないでしょうか。私たちも悔い改めて、神の御言葉に聞き従うこと、それを本当に優先順位の第一位において、その時々判断、先ほどのアポクリテイスというのは、「選別する」「選ぶ」「分ける」という意味もあるのですが、一つを選択しないといけない時、どちらを選ぶのか。神の言葉に聞くのか。或いは人々を恐れ、自分の関心事を優先させるのか、日々の決断を迫られることであります。そして私たちも本当に自分が何であるかということに気が付いて、悔い改めて、神の招き、神の御言葉に聞き従うというのでなければ、あなたがたも神の裁きを免れ得ないのだと、そういうふうにイエス様は私たちに言っておられるのではないのでしょうか。これは今日のたとえも限界がありますから私たち一人一人がこのイエス様のたとえ、お言葉を聞いて自分のこととして判断して神様に従う道を選び取って行く、そのことが求められているのだと思います。

お祈りします。

神様。私たちの中にも、あなたの御言葉を聞いてもその真意を悟らず、表面的に聞き、また、自分の関心事や心配事の方に時間も能力も費やして、あなたの求めを無視している自分を見出して、恐れを覚えます。

どうかあなたの御言葉に、またみ教えに従う信仰の歩みをなさせてください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン